

図書館だより



no.204

2017(平成29)年1月12日発行

編集・発行 福島県立図書館

〒960-8003 福島市森合字西養山1番地

TEL 024-535-3218

Fax 024-536-4787

<https://www.library.fks.ed.jp/>



◆イベントのおしらせ◆ 掲載のイベントは、いずれも参加無料・申込不要です。

「長田弘文庫開設式」

日時：2月5日(日)13:15~13:20

場所：県立図書館 特殊文庫・貴重資料紹介コーナー
—昨年5月に75歳で亡くなった福島市出身の詩人・長田弘さんの蔵書が当館に寄贈されました。このたび「長田弘文庫」として開設し、そのテープカットを行います。

「^{ずえ}名所図会の世界

—ふくしまゆかりのものを中心に—

《ふくしまを知る連続講座④》

日時：1月22日(日)14:00~15:30

場所：県立図書館 第一研修室

講師：渡邊智裕 氏

(福島県歴史資料館 副主幹兼専門学芸員)

江戸時代後期の名所図会出版の歴史とその意義を概観し、福島県ゆかりの名所や人物を取り上げている『名山図譜』『日本名山図会』などを、画像を見ながら詳細に解説していきます。



福島県立図書館 長田弘文庫開設記念事業

『長田弘と出会う』会



日時：2月5日(日)13:30~15:30

場所：県立図書館 講堂

第1部 対談「20世紀を読みつづけた詩人

～長田弘文庫の開設にあたって～

長田さんの数々の詩集・エッセーを担当された編集者と、生前最後に長田さんの取材をされた新聞記者のお二人が、長田さんご本人から聞いたお話や、著作からうかがえる様々な本のことについて語り合います。

話者：尾方邦雄氏(みすず書房 編集部)

井上卓弥氏(毎日新聞社 東京学芸部編集委員)

第2部 朗読会

元福島テレビアナウンサーの原國雄氏とそのお仲間による、長田弘さんの作品の朗読を行います。

出演：「原國雄とその仲間たち」

★朗読会終了後、希望者には当館職員による長田弘文庫の案内を行います。参加定員は40名、整理券は当日受付で配布します(先着順・無くなり次第終了)。

■展示のおしらせ■ 展示コーナー

福島県歴史資料館移動展

「^{ずえ}名所図会の世界

—江戸時代の観光ガイドブッカー—

期間：1月6日(金)~2月12日(日)

江戸時代後期に数多く出版された名所図会。これらの本には挿絵も多く載せられ、観光案内書のような性格もありました。ここでは『名山図譜』『日本名山図会』など福島県ゆかりの名所が描かれたものを中心に、代表的な名所図会を展示しました。

■各種展示■ ~2月12日(日)

- ・幕末から明治へ(時事展示コーナー) ※3月1日(水)まで
- ・奥深きマンガの世界(本のひろば)
- ・郷土を描いたマンガ・県出身のマンガ家(本のひろば)
- ・宇宙に憧れて(軽読書コーナー)
- ・冬の絵本(こどものへや)

●図書特別整理のための休館のおしらせ●

2月13日(月)~2月23日(木)

月曜日及び蔵書点検のため休館します。

※休館日は当館ホームページでも確認できます。

新着案内

各分野の担当者が選んだ、お薦めの新着資料をご紹介します。

人文・自然・社会

『世界の8大文学賞 受賞作から読み解く現代小説の今』都甲 幸治／著 立東舎 2016.9 902.05/トコ169

世界の8つの文学賞の受賞作品を、芥川賞作家や書評家など本にまつわる様々な職業の人々が読み、語り合います。ノーベル文学賞を「間違っただけで獲っちゃった」と思われる人たちの作品について論じていたり、「芥川賞は日本最高の文学賞、みたいに世間では思われているが、その実態は新人賞だ」など、日本の芥川賞・直木賞についての評価や意外な役割などについても語られていたりして、文学に親しみのない人にとっても興味深く読める文学賞のガイドブックです。

『クラフツマン 作ることは考えることである』リチャード・セネット／著 筑摩書房 2016.7 502/セ167

“クラフツマン”の日本語訳は“職人”とされています。作ることは人間の本质であり、誰でもより良いものにしようと努めずにはいられない。その意味では芸術家も科学者も政治家もクラフツマンでありえるのです。哲学者ハンナ・アレントは「モノを作る人間はたいてい自分たちが何をしているか理解していない」と考えました。それに対し、著者が「本当にそうなのだろうか、考えることは含まれていないのか」と抱いた違和感から考察が始まります。作ることという視点で、人間が作りあげてきた社会を考える一冊です。

『「考古学エレジー」の唄が聞こえる 発掘にかけた青春哀歌』澤宮 優／著 東海教育研究所 2016.7 210.025/サ167

発掘現場にて歌い継がれてきた唄、考古学エレジー。誰が作り、どのように歌われてきたのか？その背景を辿ると共に、歌詞に込められた哀切の源である考古学者の生き様を紹介しています。考古学は戦前、皇国史観により学校では教えられず、戦後は開発の波に押し込まれ多くの遺跡が破壊されてきた過去を持っています。そのような中、純粋な気持ちで遺跡と向き合ってきた考古学者たちの生き方から、学問への熱い思いが伝わってきます。

児童・児童図書研究

『先生が本（おはなし）なんだね 語りの入門と実践』伊藤 明美／著 小澤昔ばなし研究所 2016.11 J015.8/1

長く子どもたちにおはなしを語っている著者による語りの極意が本になりました。子どもにおはなしを語る意味、選ぶこと、覚えること、プログラムの組み方などの入門編から、より良く語るための実践編、巻末には「おすすめ昔話絵本と昔話集」が掲載され、初めて語ろうとするためのテキスト選びや、数多く出版されている中から子どもに手渡していきたい昔話絵本を選ぶ基準として参考になります。語りの世界に包まれた子どもたちの息づかい聞こえてくるようです。

雑誌・新聞

2016年12月15・16日に行われた安倍首相とプーチン大統領の日露首脳会談。平和条約や領土交渉、今後の経済協力体制など、日露関係で重要視される事案がどのような進展を見せるかが注目され、会談後の報道は成否の両面を伝えました。

今回は、新着雑誌・新聞からロシアとプーチン大統領についての記事を紹介합니다。

*特集 プーチンのすべて

『Newsweek』2016年12月20日号 Z/051/N11

*北方領土—安倍・プーチンの決断

『中央公論』2017年1月号 Z/051/C1

*笑うプーチンを信じてよいか

『Voice』2016年12月号 Z/051/V1

*まる分かり北方領土&ロシア

『エコノミスト』2016年11月15日号 Z/330.5/E1

*プーチン流政策 輸入代替の功罪

『ジェットロセンサー』2016年11月号 Z/670.5/J1

*「英のEU離脱とロシア」/木村 汎[著]

『海外事情』2016年12月号 p.53-75 Z/302/K2

*「THE PUTIN GENERATION」/Julia Ioffe

『NATIONAL GEOGRAPHIC』2016年12月号 p.76-101 Z/290.5/N1

*「Abe-Putin summit ends with no concessions」
The Japan times 2016年12月17日 1面

地域

『幼年の色、人生の色』長田 弘/[著] みすず書房 2016.11 LA914.6/02/27

2015年5月に逝去した福島市出身の詩人・長田弘が編んでいた最後のエッセイ集。

「幼い子どもだったころのことは、何一つ秩序だっで覚えていない」と、場所と記憶を紡いだ表題作「幼年の色、人生の色」から始まり、「遠い日の友人の死」「人生の特別な一人に宛てて」「福島、冬ざれの街で」「じゃあね」と結ぶ38篇。ボブ・ディランのライブを36年ぶりに間近にしたエピソードから始まる「二十一世紀の『草の葉』」も収録されています。等身大の長田弘を伝える一冊です。

『ふくしま讃歌 日本の「宝」を訪ねて』黛まどか／著 新日本出版社 2016.9 L915.6/M3/1

2013年春から2016年夏まで「福島民報」に連載された俳句紀行「ふくしまを詠む」をまとめたもの。

「宝」を掘り起こし「誇り」を取り戻すきっかけになってほしいと、著者自身が各地を巡りその場に佇み自然や人々に向き合い、伝統行事に参加し、福島本来の魅力と被災者の今を俳句に詠む。

福島市の花見山、昭和村の成木責、会津美里町の虫送り、三島町の雛流し、手仕事…丹念な取材と温かな視点が溢れた文章は、私たちにもう一度故郷を思い起こさせるものです。